

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベル5（避難）が継続＞

新岳では、6月19日の噴火以降、噴火は発生していません。

昨日（3日）に九州地方整備局の協力により、気象庁機動調査班（JMA-MOT）が実施した上空からの観測によると、白色の噴煙が西側の割れ目付近と北側の火口縁付近及び、南側の火口壁から上がっているのを確認しました。また、新岳火口及び火口周辺の形状に特段の変化は認められませんでした。赤外線熱映像装置¹⁾による観測では、新岳火口内に熱異常域を確認しました。また、新岳火口西側の割れ目付近及び、北側と南側の火口縁に引き続き熱異常域を確認しました。

5月29日と同程度の噴火が発生する可能性は低くなっているものの、引き続き噴火の可能性があり、火砕流²⁾に警戒が必要と考えられます。

【防災上の警戒事項等】

噴火に伴う大きな噴石の飛散が予想される新岳火口から概ね2kmの範囲、及び火砕流の流下による影響が及ぶと予想される新岳火口の西側の概ね2.5kmの範囲では、厳重な警戒（避難等の対応）をしてください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るため注意してください。降雨時には土石流の可能性があるので注意してください。

○ 活動概況

・表面現象の状況（図1～4、図5-①⑤）

昨日、九州地方整備局の協力により、気象庁機動調査班（JMA-MOT）が実施した上空からの観測によると、白色の噴煙が西側の割れ目付近と北側の火口縁付近及び、南側の火口壁から上がっているのを確認しました。また、新岳火口及び火口周辺の形状に特段の変化は認められませんでした。赤外線熱映像装置による観測では、新岳火口内に熱異常域を確認しました。また、新岳火口西側の割れ目付近及び、北側と南側の火口縁に引き続き熱異常域を確認しました。

・地震や微動の状況（図5-②③⑥⑦）

火山性地震は、少ない状態で経過しています。火山性微動は、6月19日に発生した以降、観測されていません。

- 1) 赤外線熱映像装置は物体が放射する赤外線を検知して温度分布を測定する測器です。熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。
- 2) 火砕流とは、火山灰や岩塊、空気や水蒸気が一体となって急速に山体を流下する現象です。火砕流の速度は時速数十kmから数百km、温度は数百℃にも達することがあります。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。

この資料は気象庁のほか、海上保安庁、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所および屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平26情使、第578号）。



図1 口永良部島 新岳火口の状況（上段：2015年11月3日、下段：2015年6月9日）

- ・ 白色の噴煙が西側の割れ目付近及び、北側の火口縁から上がっているのを確認しました。
- ・ 新岳火口及び火口周辺の形状には特段の変化は認められませんでした。

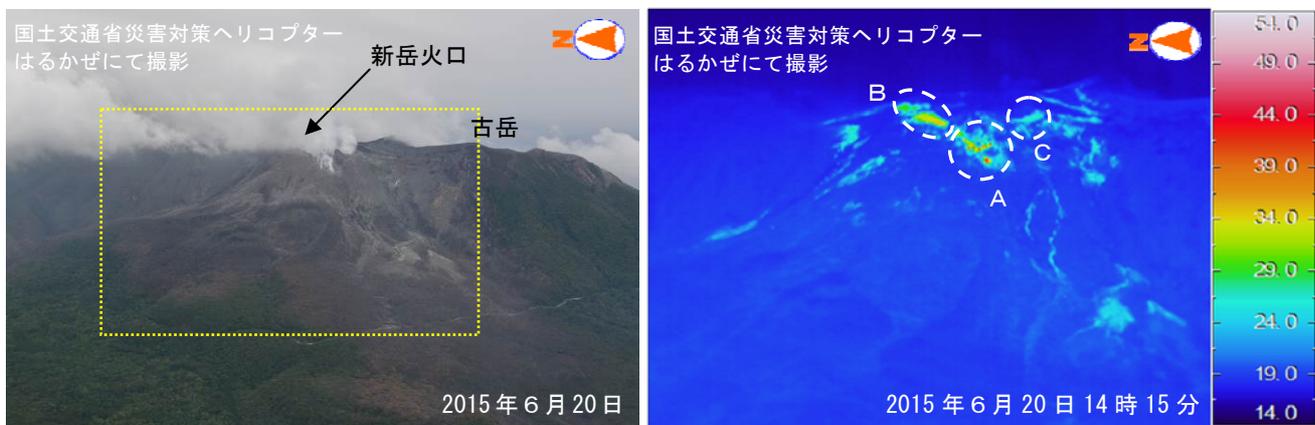
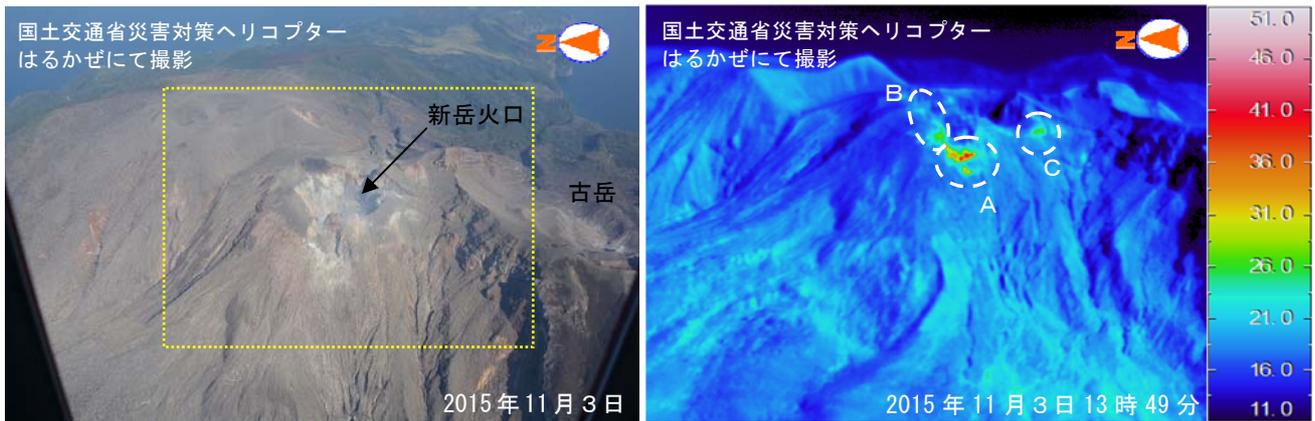


図2 口永良部島 新岳及び古岳の西側斜面の状況（上段：11月3日、下段：6月20日）
（黄色破線は右の熱画像の範囲を示す）

新岳火口の西側割れ目付近（領域A）及び、北側と南側の火口縁（領域B、C）に引き続き熱異常域を確認しました。

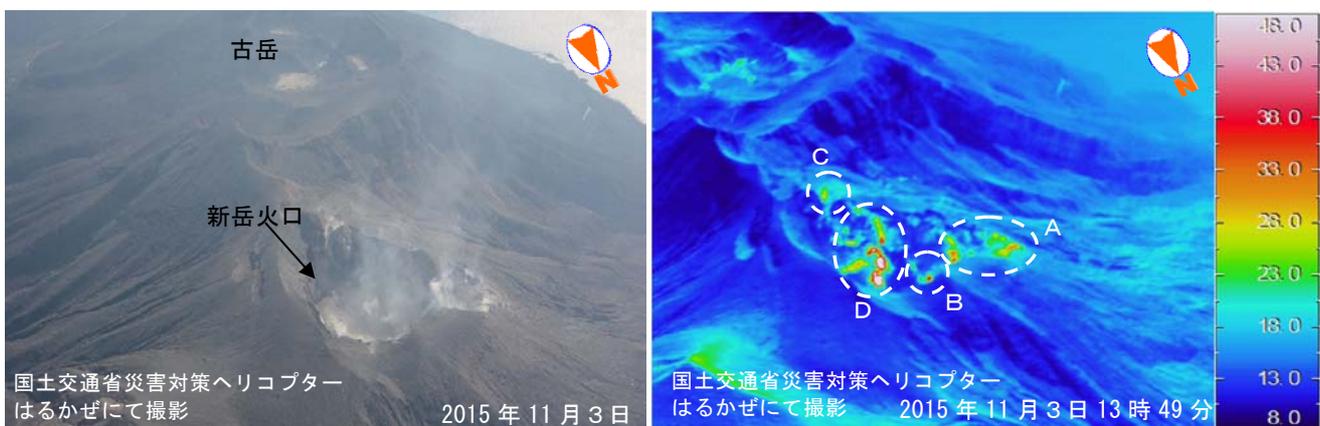


図3 口永良部島 新岳及び古岳の火口内の状況

- ・新岳火口内に熱異常域を確認しました（領域D）。
- ・新岳火口の西側割れ目付近（領域A）及び、北側と南側の火口縁（領域B、C）に引き続き熱異常域を確認しました。

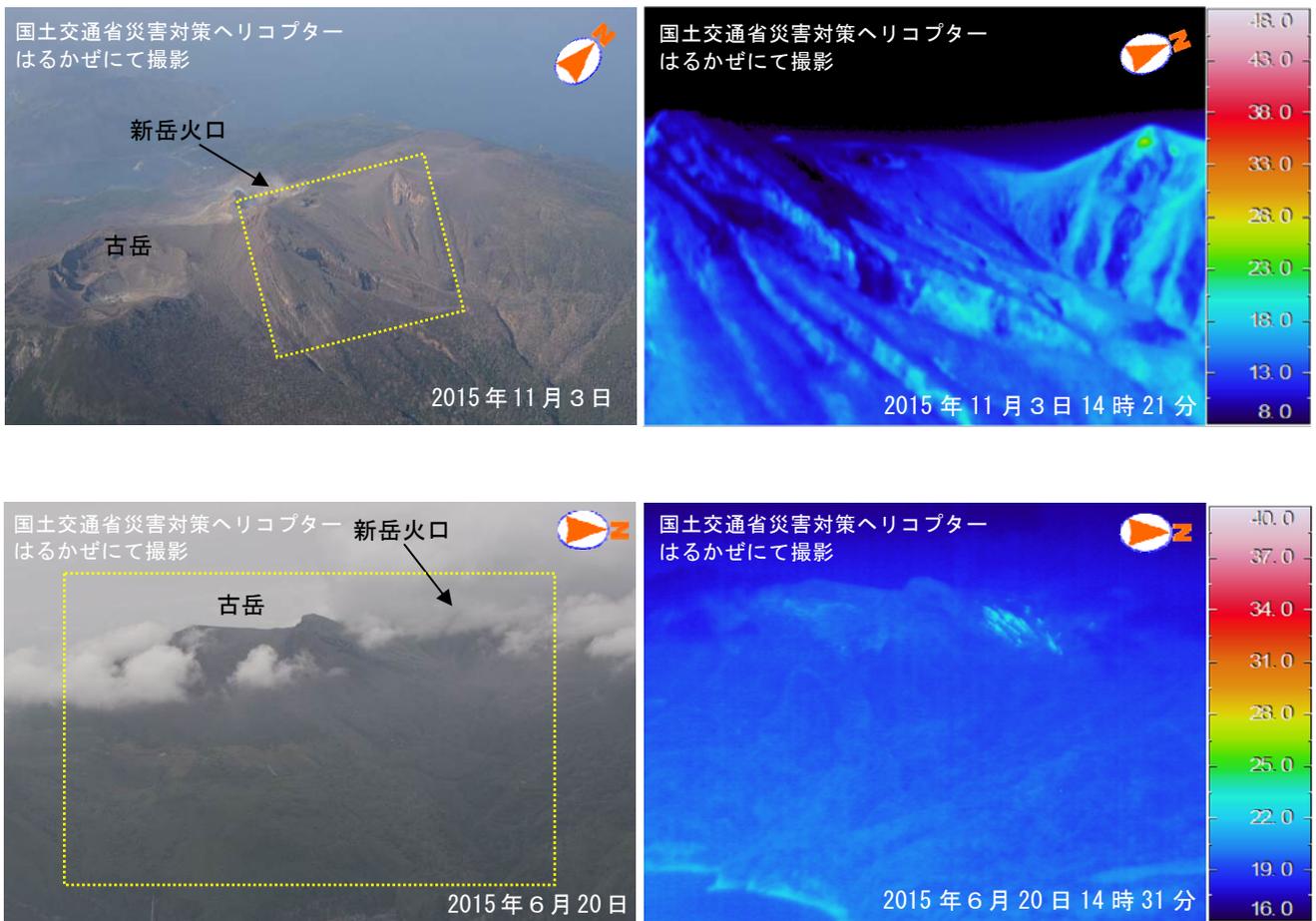


図4 口永良部島 新岳及び古岳の東側斜面の状況（上段：11月3日、下段：6月20日）
（黄色破線は右の熱画像の範囲を示す）

新岳及び古岳の東側斜面では熱異常域は認められませんでした。

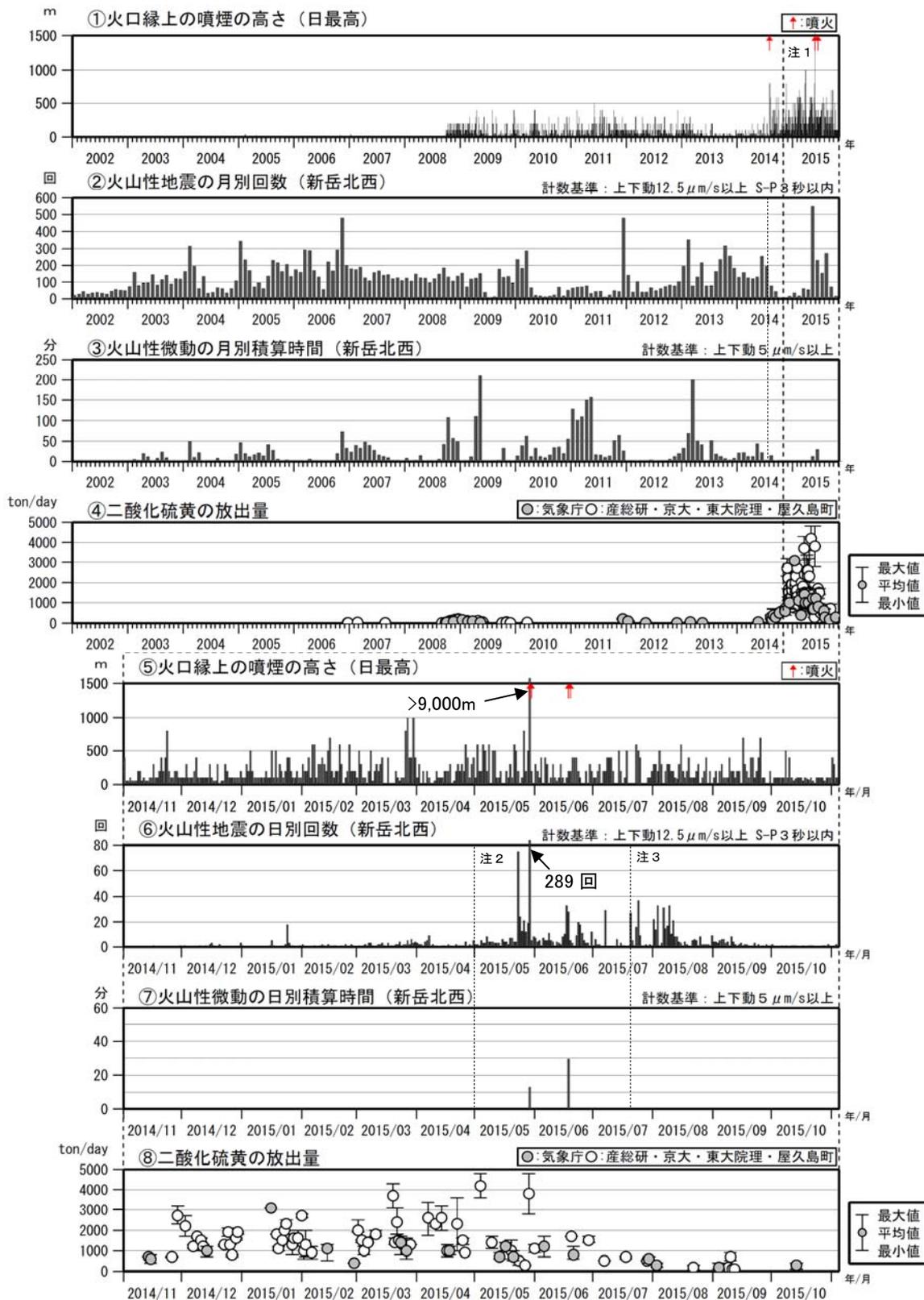


図5 口永良部島 火山活動経過図（2002年1月～2015年11月4日12時）

- ・火山性地震は、少ない状態で経過しています。
- ・火山性微動は、6月19日に発生した以降観測されていません。

注1 2014年8月3日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、噴火以降は新岳火口から約2.3kmにある新岳北東山麓観測点で計数しており、検知力が低下しています。

注2 2015年5月23日に島内のごく浅いところを震源とする地震（震度3、M2.3：暫定値）が発生したことから、監視を強化するため、5月1日から計数基準を変更しています。

注3 2015年5月29日の噴火及びその後の停電や通信障害により、複数の観測点が障害となり検知力が低下しています。このため、7月21日から計数基準を変更しています。

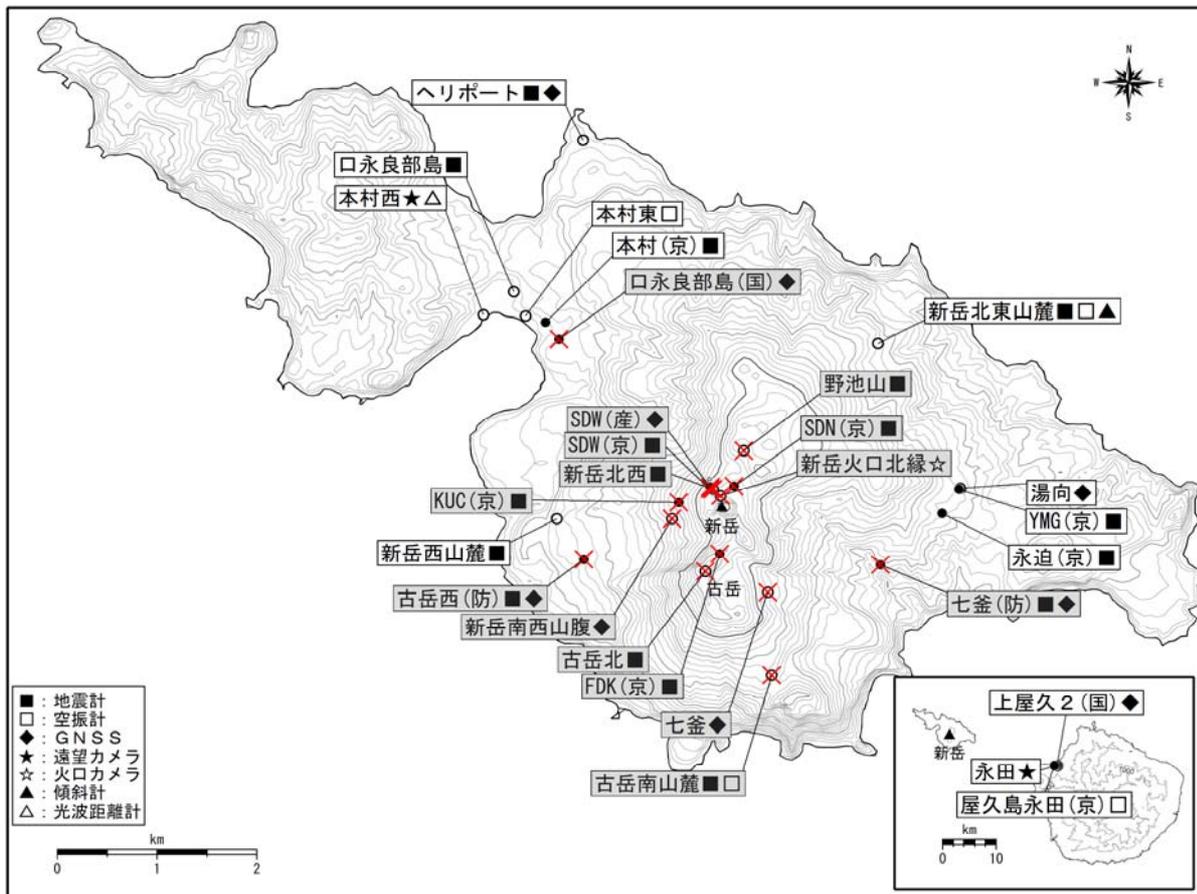


図6 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国): 国土地理院、(京): 京都大学、(防) 防災科学技術研究所、(産): 産業技術総合研究所

図中の赤×印及び灰色の観測点名は、噴火や停電等により障害となった観測点を示しています。